

『今月の天候と農作業』

通巻第5624号
2月号
平成31年2月7日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

- ・暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高い見込みです。
- ・低気圧の影響を受けやすく、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込みです。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	50	30	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、高い確率60%です。

<1週目の予報> 2月9日(土)～2月15日(金)

気圧の谷や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、期間の後半に雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 2月16日(土)～2月22日(金)

低気圧の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 2月23日(土)～3月8日(金)

低気圧の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 播種と出芽

浸種は発芽揃いを良くするために水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度と十分に行います。ただし、10℃以下の低温を避け、夜間の冷え込みにも注意します。浸種後は、催芽を30℃～32℃で24時間行います。

播種量は、稚苗では催芽粃で180g程度です。厚播きは徒長苗になりやすくなるので注意します。苗立枯病等の防除を兼ねてかん水し、覆土は粃が隠れる程度とします。

段積みでの出芽は、地面と箱の間に隙間をつくり、積重ねは十段程度とします。平置きの場合は温度が上がりにくいので加温します。温度は28～30℃で、出芽長は床土面から5～10mmで終わります。高温や期間が長くなるとリゾープス菌（クモノスカビ）が発生します。

2 緑化と硬化

寒冷紗等で3日程遮光し、温度について昼間は25℃以下、夜間は15℃以上を保ちます。本葉1葉目が展開し、2葉目が抽出した頃までです。この時の苗の第一葉鞘高（腰高）を4cm以内とします。

硬化の前半について昼間は20℃以下、夜間は10℃以上を保ち、後半は外気にならします。かん水は床土温度を下げないように午前中に行います。

なお、中苗や成苗では、播種後20日目と30日目頃に液肥を散布し、散布後は軽くかん水して葉焼けを防ぎます。

◆ムギ類

1 穂肥

早いところでは月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10a当たり窒素成分で2・5kg、加里で2kg程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるため、麦が節間伸長期に入る前までに行います。排水対策は圃場周囲や条間に作溝します。

(荒砂英人)

施設野菜

◆共通事項

中旬までは午前中の温度確保と、内張カーテンの開放による光線確保により光合成を促進します。下旬になると日射量も増え、最低気温も徐々に高まるため、加温機の稼働時間が短くなり、ハウス内湿度の上昇に伴う病害の発生が多くなるため、夜温の高い日は内張カーテンの調節により、適度に加温機が稼働するようにします。また、収穫までの日数も短くなり、着果量も増えてくるため、追肥とかん水量を増やしますが、1回の量を増やさず、かん水間隔を短くするなど、極端に栽培環境を変えないよう、こまめな管理を心掛けましょう。

◆きゅうり

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいため、開花や収穫果の位置（生長点から3～4節目で開花、10節前後で収穫できるのが理想）に注意します。開花節位が上がった場合には、強めの摘果を行うとともにかん水量を増やして、草勢維持に努めます。

◆ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝も伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。ハウス内の温度は、午前中28℃、午後は徐々に温度を下げ夕方25℃、夜間18℃とします。

◆トマト

果実肥大と着色促進及び食味向上のためには、日射量の確保と葉数確保が必要となるため、日中の内張カーテンの開放と15～18枚程度の葉を確保します。下旬以降は、着色までの日数も徐々に短くなり、着果数も増えてくるため、かん水量を増やして草勢維持に努めます。

◆いちご

曇天が続くと成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下が懸念されます。曇天が続き、日中温度が上がらない場合には、着色促進のため夜温をやや高め（8℃を上限）に管理します。また、大玉果、食味向上のため8～10果に摘果します。ハダニ類が多く発生しています。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

（黒木正晶）

葉茎菜類及びいも類

◆畦立てマルチ

これから播種・植付けする品目の発芽・活着促進は地温と土壌水分を確保することが大切です。マルチングする時はほ場の土を片手で握り団子になる程度を目安とします。逆に手が濡れるような場合は過剰であるため、適湿になるのを待って耕起します。

◆食用かんしょ

来月にかけて、トンネル栽培の挿苗時期となります。採苗10日前頃から育苗ハウス内の苗は外気温に慣らしながら管理するとともに、徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げます。なお、昨年、かんしょの地際部からの茎の枯れや芋の腐敗などの症状が発生しています。苗の切断部の消毒はしっかり行いましょう。また、調整後の薬剤は日光や汚れなどで分解しやすいので一日を目安に使い切りましょう。畑への挿苗後の発根を促進させるため、挿苗予定の数日前に採苗し、適湿・適温を保ちながら保管します。これを「取り置き苗」と言います。定植予定のほ場は、挿苗時の十分な地温確保が必要なため、トンネルは前日から密閉して地温確保（18℃以上）に努めます。地温が低く、苗が徒長してるなど条件が悪いほど活着が遅れ、株当たりのいも数も減りやすいので注意してください。

◆さといも

早生品種の定植期です。連作障害が出やすいため、最低4年はさといも栽培を休んだほ場を選び、センチュウ消毒を行います。種いもは、病害虫のあるもの、芽つぶれのあるものはしっかり除き、健全なものを大きさ順（30～50g程度）に揃え、種いもの表面に付着している土をしっかりと洗浄した上で、センチュウや乾腐病予防の薬剤消毒を行って定植します。

なお、疫病の発生要因のひとつに残さによる伝染が考えられています。定植予定ほ場の周辺に前年のさといもがある場合は、早めに片付けます。残さの分解にはトラクター速度を遅く、ロータリー回転を速くし、できるだけ細かく破碎します。また、種芋選別等で出た残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

(杉村幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。

今年は全体的に果実の成熟が早く進んでいます。これからは暖かくなり、過熟やウルミ果の発生が懸念されるため、ハウス内の温度管理に気を付けましょう。昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意しましょう。完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいため、果実の過度の積み重ねを避けるなど、丁寧に扱きましょう。

◆マンゴー

今年の早期出荷作型では1～2週間生育が早くなっています。マンゴーの果実は、大玉で鮮やかな赤色の割合が多いほど高品質の果実とされ、高単価で取引されます。

このために重要となるのが、摘果と幼果期からの日照確保です。摘果の際は、極端な早期摘果は避け、果実の縦径が3 cm程度になったのを確認してから行いましょう。その後は、果実を吊り上げて、光が十分に当たるようにしましょう。果実が5 cm程度になったら、結果枝2～3本当たり1果に結果数を調整しましょう。

後期出荷作型も順調に生育していますが、特に剪定が遅かった園では生育にばらつきが見られています。これから開花期を迎えるため、早朝換気や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ち、花の時期から病気の発生をしっかりと抑えましょう。花穂が伸びてきたらひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。

2 果樹全般

◆有機質の投入と土壌改良

果樹栽培において高品質・高収量を得るためには、土壌の通気性の確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行いましょう。

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整しましょう。

(鈴木美里)

花き

◆電照ギク

2～3月出荷の作型は最も暖房コストがかかる作型です。それぞれの品種、系統に適した変夜温管理を行い、コスト削減に努めましょう。

一方、施設の多層被覆によりハウス内湿度が高まると、白さび病が発生しやすくなるため、換気除湿や循環扇の活用、定期的な予防散布などを行ってください。なお、除湿機能を持つ被覆資材の導入も効果的です。

「神馬66-4」の3～4月出荷作型の再電照は、総苞りん片形成後期から3～4日間実施します。なお、開始時期については、事前に必ず花芽検鏡を行った上で決定してください。

◆スイートピー

2月に入ると天候が不安定になりがちです。こまめに天候を確認し、細やかな管理を行ってください。

また、日長時間が徐々に長くなるとともに、株の成長に従って養分要求量も増加することから、かん水及び施肥を遅滞なく行い、草勢低下を防ぎましょう。

一方、天候不順時には「花シミ」が発生しやすくなるため、換気に努めるほか、循環扇等でハウス内の空気を動かして結露を防ぐなど「花シミ」の軽減を図ってください。また、灰色かび病対策として、定期的な生物農薬のダクト散布も忘れずに実施してください。

◆ホオズキ

7月出荷は2月上旬まで、8月出荷は中旬からの植え付けとなります。

植え付け前はしっかりと土壤消毒を実施するとともに、ネコブセンチュウや白絹病などをほ場に持ち込まないよう、十分に注意して地下茎の選別・調整を行います。なお、必要に応じて地下茎を消毒してください。

◆デルフィニウム

沿海地域では2番花の収穫期から3番花の萌芽期になります。

ボリュームを確保するためにも、適正な仕立て本数に整枝して下さい。また、下旬頃からうどんこ病の発生が多くなるため、発生前からの定期的な予防散布を行いましょう。

◆トルコギキョウ

天候不順時には、特に八重系のブラッシングや成長点の障害が心配されます。

適正な温度管理に加え、不要な枝や蕾の摘除、カルシウム剤等の葉面散布で発生の軽減を図ってください。

また、花卉における灰色かび病や花粉へのカビ発生対策として、生物農薬のダクト散布を行いましょう。

◆ラナンキュラス

収穫量が徐々に増加しています。草勢低下防止のために、窒素成分で150ppm程度の濃度の液肥を定期的に施用してください。

また、ハウス内温度が低すぎると、回転が悪くなり収量に影響するため、日中の温度管理は15℃程度を目安にしましょう。

(藤原明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

今月は、「家畜防疫強化月間」です。

豚では、国内で、豚コレラが1月29日現在で7例発生しており、野生イノシシにおいても、豚コレラ陽性事例が確認されています。また、中国では、アフリカ豚コレラが続発しており、モンゴルでも1月に初めてアフリカ豚コレラの発生が確認されました。国内への侵入リスクが高まっています。これらの法定伝染病から、農場を守るため、豚舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

鶏では、鳥インフルエンザの発生リスクが高い時期が続きますので、野鳥がウイルスを持っているという意識を持って、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

先月同様、寒さが厳しく、乾燥する時期になります。

哺乳子牛などの幼畜は、寒さや急激な温度変化に弱いので、隙間風が牛体に直接当たらないようにコンパネやシート等で隙間風を防止するとともに、コルツヒーターや赤外線ヒーター等の保温器具を使用し、防寒対策をしっかりと行いましょう。また、子牛のお腹を冷やしてしまうと免疫の低下につながり、防寒対策の効果も下がるため、床は常にきれいで乾燥した状態にし、敷料を厚めに敷きましょう。この時期は、牛舎内の温度維持のためカーテン等で牛舎を閉め切りますが、換気不足により牛舎内にアンモニアガス等が溜まると呼吸器病（風邪等）の蔓延につながります。朝、牛舎に入ったら、カーテン等を開放して、新鮮な空気を取り込みましょう。

(大山佐喜子)

工芸作物

◆茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶を始め二・三番茶の収量品質向上に重要な肥料で、2月上旬頃から施用します。2～3回に分けて施用するとより効果が高まります。肥料の種類や散布量は地区の基準に準じ、畦間全面に幅広く散布します。施肥後は根を傷めない程度に軽く攪拌します。樹勢の低下が認められるほ場では、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢回復に効果的です。

2 春整枝の実施

春整の時期は平均気温10℃が目安です。平坦地では2月中旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、1番茶摘採期の集中を避けるため、品種の早晚生や地域の微気象等を考慮し整枝時期を調整します。その際は、整枝直後に急激な低温に当てないように天気予報に注意しましょう。

整枝の高さは、葉層を8cm以上確保した上で、最終摘採位置から3～5cm高い位置としますが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝します。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要となります。計画的に防霜ファンやスプリンクラーの点検・整備に取り組み、防霜に万全を期しましょう。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。

地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。散布前までに、春整枝と裾刈りを済ませておくことより防除効果が高まります。

(黒木清人)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、時期が遅れると害菌の付着が多くなりますので、遅くとも3月中旬までには終わらせましょう。

仮伏せは、植菌した種駒の乾燥を防ぎ初期活着を促進する作業です。菌糸の活着に必要な温度と湿度を保つ必要があり、本県では、地際から50～60cm以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないように被覆し、保温・保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めましょう。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めましょう。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取しましょう。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵しましょう。

(古澤英生)

◆たばこ

今月は、子床管理と施肥畦立が主な作業となります。苗の良否が本畑以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めましょう。

1 苗床肥土は排水・通気性・水もちが良く、病害虫が発生しない、良質な肥土を使用しましょう。

仮植は葉数五枚苗（米粒大までの葉数）の、根張りの良い苗を仮植しましょう。活着までは床面が乾かない程度に灌水を行い、活着後は夕方床面が少し乾く程度に灌水をやや控えめにして、病害発生や根腐れ防止をはかりましょう。また、苗床が高温多湿にならないよう温湿度調整（管理温度は20～25℃）を行いましょう。

本畑移植10日前ぐらいからは、苗の根張りを促進するために、換気と灌水制限をして順化処理を行いましょう。

2 畦立は、ねり畦防止のため、土壌水分に注意して行ないましょ。また、根張り促進のための地積確保と、排水対策も含めて30cm以上の高畦にしましょ。

被覆は早作早進のため透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等必要に応じてシルバーマルチ等を活用しましょ。

3 春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に則って最善の注意を払いながら行いましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜類	病害全般	—	多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底します。特に多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。各種病害の罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
冬春きゅうり	べと病※※ うどんこ病 灰色かび病 褐斑病	多 並 並 並	平年に比べ、べと病の発生が多く見られます。既に発生が多いハウスでは、1週間間隔で複数回の連続防除を徹底します。また、薬剤の感受性低下（耐性菌の出現）を防ぐため、薬剤のローテーション散布を行います。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年・前々年より多い やや少	黄化えそ病の発生が見られます。圃場内を注意して観察し感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最低でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、改植時には粒剤等による防除を行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	並 並	斑点病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。
	※※ ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ カバコナジラミ	少 多 並	ヒラズハナアザミウマの発生が多くみられます。主に花の中に生息していますので、薬剤防除は、薬液が花の中にしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 疫病	やや多 やや多 やや少 並	いずれの病害も多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風機を稼働させるなど除湿に努めます。 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます。
	カバコナジラミ トマト黄化葉巻 病 (TYLCV)	並 並	ウイルスを媒介するタバココナジラミの発生は平年並の状況ですが、施設内には黄色粘着トラップ等を設置し、媒介虫の早期発見・防除を徹底します。また、発病株は根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	並 並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする等発生初期の防除を徹底します。 炭疽病を確認時には、直ちに根ごと抜き取り適切に処理します。
	ハダニ類	並	ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
	オンシツコナジラミ ヒラズハナアザミウマ	やや少 多	オンシツコナジラミについても、薬剤感受性の低い個体群が確認されていますので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。 平年に比べ、ヒラズハナアザミウマの発生が多く見られます。果実への加害は、3～4月以降に顕著に認められますが、低密度時から青色粘着板による誘殺などの防除対策を講じましょう。
<p>1) ※※は注意報を公表しています。</p> <p>2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnp.ne.jp/miyazakiです。</p>			

